

『天樹』二〇一二年刊

この世へと抜けてすつくと葉鶏頭
短日のひらいて小さき父の胃腑
木枯しに乗りてみるみる獏の貌
土器の縁より枯の世を見渡しぬ
雪しまき闇より触るる魂いくつ
はこべらや弥勒眠たいならここへ
宇宙塵ほどなく蝌蚪の国つくる
葦野火を刎ねて陽炎浮き上がる
鳴く亀の宇宙はしんと湿るらむ
全兵器しやぼん玉になりあそべ
てふてふの殲滅ぱれすちな現世
地下にしてすだまの映る作り滝

青葦を出ようか蛇の子でも連れて
圧倒的なゾンビダンスが夏の遺書
泳ぐ人見ながら通夜へ急ぎけり
銀河より山に下ろせし巨石かな
世去りとは秋の光のちらし書き
やまね眠る森に始まる恵方みち
氷上の舞や修羅どき修羅になる
ぢつとしてゐよと叱られ内裏雛
大桜かこむ非在の夜のさくら
はつ夏や明王あそぼと童子たち
遠雷は亡き師と胸に収まりぬ
神獣みな首を伸べたり天の川
天の師の鞆ひらけばいわし雲
長十郎下駄履きの師を懐かしむ

梨剥くや起きてゐる父眠れぬ子
冬苺つぶやきの詩の永らふよ
狐火に揉まれし寒のかくし酒
冬帽子向うの世より投げて来よ
叫天子騙し絵ならぬ津波あと
大混沌つつむ春あり宇宙ひらく
透きとほる時の果てより春の息
うららかや木魚は宇宙へ躍る
目ざす血は甘さ控へめ梅雨の星
身のうちは悪玉そとは黴の王
原発密閉ぎつしりと蓮の花
五月雨や原発へ暁斎の怪魚
原発の犠の牛なり莞爾と笑ふ
凌霄のくちびる雲へ触れむとす

絹すすき指して程よき媼ごゑ
月の出の天樹や霊亀翔けめぐる
懐かしや百の鬼首霧に鳴る
この上を山が飛びしか冬泉
躍り切らむと雪吊の中の松
初夢や迦楼羅<sup>カ
ル
ラ</sup>ビョークを生む
霜柱踏むやチャップリンの破調
原子炉をしたふ狐火などあるか
大挙して文字化けになる蝌蚪の国
はじまつてしまふ寿限無や万愚節
天心に出て佐保姫の子だくさん
春服の隠しどころの快癒かな
青梅雨や都電に坐る人魚がほ
田中正造翁脈づく大葦原の青